

# 經濟論叢

第七十八卷 第二號

---

世界經濟と経済学……………松 井 潜 ( 1 )

レーンの市場の理論……………堀 江 英 一 ( 13 )

為替レート切下げの交易条件に与える効果……………西 川 徹 ( 33 )

イギリス革命における農民闘争評価の問題……………武 暢 夫 ( 57 )

---

[昭和三十一年八月]

京 都 大 學 經 濟 學 會

# 世界経済と経済学

松 井 清

一

世界経済の諸問題を、経済学のなかで、どのように位置せしむべきであるかについては、これまで恐慌の問題や、外国貿易の問題や、財政制度の問題などとともに、マルクスの経済学体系のプランに関連して、しばしば論じられたところである。わたし自身もかつて世界経済の原理的把握のためこの問題についての簡単な私見を発表したことがあるが、問題の研究についてのその後の発展、とくにドイツ民主共和国における論争などを考慮に入れて、もう一度考え直してみたいと思う。

マルクスの経済学体系については、大別して二つの問題があるように思う。第一は、かれが最初に発表したプランが、その後とくに資本論を書くに当って、重大な変更を加えられることなく、したがって資本論はその一部分として書かれたものか、或いは全然変更して書かれたものかについての解釈に関する問題である。この問題については、わが国では古く久留間教授の詳細な研究があり、そのなかで氏は、プランが変更されたとするカウツキーやグロスマンの見解を批判しながら、結局資本論はプランの一部分として書かれたものであるとの見解をとられてい

る。<sup>2)</sup> 最近發表された宮本義男氏の論文も、接近の方法は大分異っているけれども、その結論においては、久留間教授の見解に近いように思われる。<sup>3)</sup> こうした意見に対して、「経済恐慌」の著者エルスナー教授が、変更説をとっていることは、さきにも触れた通りである。わたしがその根拠を示してくれといったとき、教授は沢山の書物の置かれた書棚に向つて、目的の書物を探し始めたが、会見の時間が限られていたため、とうとう探すのを断念された。恐らく教授はカウツキー版の「経済学批判」でも探して居られたのであろうと思われるが、それについての話はそれ以上には進まなかつた。

第二の問題の扱い方は、プランが変更されなかつたと仮定して、といて悪ければ、プランが変更されたかどうかという事実の問題に余り立入らず、プランと資本論とを比較して、資本論はプランのうちどの部分までを論じているか、さらには論ずべきであるかという形で問題をとりあげるやり方である。ここでは第一の問題はしばらくおき、第二の問題に焦点をしばることにしよう。

- (1) 松井 浩「世界経済学原理」(日本評論新社)
- (2) 久留間敏造「恐慌論研究」(新評論社)
- (3) 宮本義男「『資本論』のプランについて」(経済評論一九五六年六月号)

## 二

一八五九年一月の日付をもつ「経済学批判」の序文にかかけられたいわゆる経済学のプランは、つぎの六項目からなっている。

- (1) 資本
- (2) 土地所有
- (3) 賃労働
- (4) 国家
- (5) 外国貿易
- (6) 世界市場

「最初の三項目でわたしは、近代ブルジョア社会を形成する三大階級の経済的存立の条件を検討する。残りの三項目の連関はおのづから明らかである。資本を取扱う第一巻の第一部は、次の諸章からなる。第一章商品、第二章貨幣あるいは簡単な流通、第三章資本一般。最初の二章がこの仕事の内容をなす。」

さてさきにあげた久留間教授の見解によると、マルクスの資本論は、この第三章資本一般をその内容とする仕事であり、したがってこの見解からすると、プランを構成する二、土地所有以下の項目は、未完成のまま残されていることになる。久留間教授がこうした見解に到達されるには、詳細な論証の過程があるが、それには触れないことにしよう。ここで議論を進めてゆくうえにおいて触れておかねばならぬのは、こうした見解に対する宇野弘藏教授の批判である。教授は次のようにいわれる。「『経済学批判』の序文その他にあげられている所謂マルクスのプランなるものにおける『賃労働』なり、『土地所有』なりが、本来如何なるものを意図したものであるか否かには関係なく、『資本論』における賃銀、地代の規定はこれを欠いては『資本論』の理論体系をなさないことになるのではあるまいか。しかし賃銀、地代等に関して若しそういう風になってよいということになれば、恐慌についても、これを単

に久留間教授の様に『いわば資本一般の——もしくは理想的平均における資本家的生産様式の内的組織の——論理的叙述の諸階程におけるこの問題への論及にとどまる』べきものとはいえないのではないであらうか。勿論、教授のこの言葉は、實際上『資本論』がそうなっているということはいわれるのであるが、しかし教授はこの『資本論』の實際を『経済学批判』のマルクスのプランによって合理化されようと言われるだけであって、積極的に『資本論』のような原理論で何故に恐慌の必然性が論証されてはならないかは明らかにされていない。『マルクスの恐慌論はその経済学批判の体系と共に未完成の状態に残されている』といわれるのである。しかし賃労働や資本家的土地所有と同様に、恐慌についてもその基本的規定が『資本論』の様な原理論でなされてはならないという理由はない。またなされなければ恐慌をもって資本主義に特有な現象となすことは出来ないのではなからうか。かくて問題は、むしろ『資本論』でこれが恐慌論であるという、何人にも疑いの余地のない恐慌理論が何故展開されなかったかにあるのである。<sup>2)</sup>

ここに示された宇野教授の指摘には二つの主張が含まれていると思う。第一は資本論のなかには、本来マルクスがプランのなかで意図していたものと正確に一致するか否かは一応別として、賃労働や土地所有の問題が含まれている。けだしそれらを欠いては、剰余価値の生産を明らかにしようとする資本論の本来の目的が達せられないからである。第二に、資本論のような「原理論」の内容は、単にプランの形式だけから論じられるべきものではなく、それには資本主義生産の本質に関する洞察、資本主義の一般的法則は何を含むべきであるかの確固たる考え方が必要であるということである。

さていま久留間教授との間の意見のちがいは、久留間教授が資本論は、プランのうち一の項目、すなわち資本一

般だけを取扱っているものであるのに対し、宇野教授は、二、三の項目、すなわち土地所有も、賃労働も取扱われているとする点である。宇野教授の見解によると、賃労働や土地所有に触れるのでなければ、資本主義生産の一般的法則は十分明らかにならないからである。尤も宇野教授も、資本論のなかで見出される賃労働や土地所有の叙述が、本来プランのなかで計画されたものと正確に一致するかどうかについては、はっきりと明言することを避けて居られるようである。この二つの見解のうち、いづれが正しいかは、簡単に結論を下すことはむづかしいように思う。わたしはかつて「世界経済学原理」のなかで、久留間説を通説に近いもののように書いたけれども、必ずしもそうとはかりいえないふしがある。とくにプランの問題とはかわりなく宇野教授が、土地所有や賃労働の問題を、資本主義の一般法則を取扱う「原理論」においては必ず取扱うべきであるとされる主張には、教えられるところが多い。たとい久留間教授の主張されるように、現実にわれわれの前にあたえられている資本論が第一の項目だけで終っているとしても、第二、第三の項目が資本主義の一般法則を明らかにする場合、必ず触れられなければならぬとする主張は、十分に成立しうる。久留間説では、その点が余り考慮されていないのではないだろうか。その点を考慮して再びプランに立帰ってみると、プランのうちにおかれた、第一、第二、第三の項目群と、第四、第五、第六の項目群の間には、質的に区別されるものがあるような気がする。その気持はすでに引用したマルクス自身の言葉のなかにもうかがわれる。マルクスは前三項目を「近代ブルジョア社会を形成する三大階級の経済的存立条件」としている。後の三項目の連関は、おのづから明らかであるとして、その内容の規定がないのは遺憾であるけれども、このように六項目を二つの問題群に大別していることは、その間に何らかの質的差異をみとめていたためであると考えるわけにはゆかないであらうか。

(1) マルクス「經濟學批判」

(2) 宇野弘蔵『資本論』における恐慌理論の難点 (社会科学硏究第三卷第三号)

### 三

そこでつぎに考えてみなければならぬのは、第四の項目以下の性格である。国家、外国貿易、世界市場の問題は、資本主義の一般的法則に対してどのような關係に立つものであろうか。

これまで殆んど常識となつてゐるところでは、これらの諸範疇は、歴史的具體的なものであつて、資本主義の一般的法則を考察する場合には、抽象されねばならぬということである。マルクスは資本論第二卷の第三編でつぎのようにいつてゐる。「資本制生産なるものは、總じて外国貿易なしには実存しない。だが、与えられた規模での正常な年々の再生産が想定されるならば、それによつて次のことも想定されてゐるのである。すなわち、外国貿易によつては、使用形態または現物形態を異にする財貨によつて国内の財貨が填補されるにすぎぬのであつて、価値比率は、——したがつてまた、生産手段および消費手段なる二つの範疇が相互に転態されあう価値比率も、これらの各範疇の生産物の価値が分裂するところの不変資本・可変資本および剰余価値の比率も、影響されぬということ、これである。だから、年々再生産される生産物価値の分析に外国貿易を挿入することは、ただ混乱を生じうるのみであつて、何らの新なる契機も——問題のたゞそれ、その解決のたゞそれ——提供しうるものではない。だから、外国貿易はまったく捨象されるべきである。」

三つの項目中、とくに外国貿易が、資本主義にとって歴史的・具體的には必然的であるが、論理的には必然的な

ものでないということは、マルクス以後レーニンによって、繰返し主張されているところである。それを示す言葉は、かれのいろいろの著書から引用することができるが、とくに人民主義者との実現理論に関する論争のなかで、このことを強調している。例えば「ロシアにおける資本主義の發展」のなかには、つぎのような言葉が見出せる。

「資本家国にとっての国外市場の必要は、社会的生産物（及び特に剰余価値）の実現の法則によって決定されるのでは全くなく、第一に、資本主義がただ国家の境界外に出るところの広汎に發展した商品流通の結果としてのみ現われるということによって、決定される。故に、外国貿易なき資本家の国民を考へることはできない、而してかかる国民もまた存在しない。」「読者の見る如く、この原因は——歴史的性質のものである。而してナロードニキは、『資本家にとっての剰余価値を消費することの不可能』に関する一揃いの陳腐な空文句によって、この原因を免れることはできないであらう。」

要するに剰余価値の生産および実現という、資本主義の一般法則を問題とする場合、国家や外国貿易を導入することは、不必要であるばかりでなく、有害である。これがマルクス及びレーニンによって明らかにされ、今日ではあるいみで常識とさえなっている見解であるということができよう。

宇野教授がプランにおける前の三つの項目群と、後の三つの項目群を区別されるとき、このようなマルクス経済学の考え方の上に立つておられるかどうかは明らかでない。教授の著書「恐慌論」のなかにはつぎのような言葉が見出せる。「何れの国も外国貿易なしに資本主義的發展をなした国はない。しかし資本主義社会を原理的に明らかにしようとする経済原論では、それだからといって直ちに外国貿易論を扱うことは出来ない。何故そうなるか、その点はまだ決して明確にされているとはいえないのである。」<sup>3)</sup>「資本主義社会がその基本的原理を商品経済をもってす

るといふことは、他の社会との關係を商品經濟をもつてしながら、自らはそれと異つた原理をもつてする社会と異つて、一方では自らの社会の經濟的過程をそれ自身に動くものとして純粹の形で取扱ふことを可能にすると同時に、他方では實際上は對外的な商品交換の關係をもつて發展しつつあるに拘らず、その社会の全面的な資本主義化の傾向を基礎にして、全社会の資本家的商品經濟化を想定し得ることになる。對外的な商品關係が、最早やその社会の原理と異質的なものではないからである。」これらの言葉をよむと、教授が「原理論」で外国貿易を捨象されるのは、外国貿易が資本主義社会の基礎をなす商品經濟と同じ原理で支配されているからであるといふことのように理解される。しかしこの点わたしは教授と若干意見を異にする。わたしの見解では、外国貿易は資本主義にのみ伴う現象ではなく、古代社会にも中世社会にも存在する。したがつてそれ自身は、資本主義にのみ固有な法則、資本主義の一般法則を考察する場合には捨象されなければならないのである。教授の指摘されるように商品經濟が資本主義の基礎となつてゐることは事實であるけれども、商品經濟と資本主義經濟とは質的に區別されねばならぬものを含んでゐる。

この点従来わたしの考え方にも不明確な点が残されていたように思うが、最近ドイツ民主共和国でおこなわれた資本主義の經濟的基本法則にかんする論争を読んで、大分はつきりして来たように思う。この論争では色々の点がりあげられ、多くの人々がこれに参加しているが、当面の問題に関連してコールマイ教授がつぎのようにいつてゐるのは注目し値するであらう。「マルクスは資本主義經濟の基礎的範疇を引出すに際して、すべての時期のあらゆる資本主義社会に、歴史的に必然的であるが、しかもなお第二次的生産諸關係、例えば單純商品生産（とくに小農民的商品生産）、外国貿易、そして財政制度を捨象した。かくてマルクスは、資本主義生産の本質的な、歴史的に

必然的な側面を顧慮することなしに、『純粹』に、抽象的一般的に剰余価値法則を定式化した。<sup>5)</sup>「マルクスは資本の集積と集中の、独占資本主義とさらに単一の包括的な資本主義的世界経済体制への必然的な準備を、そのもつとも重要な特徴において証明した。しかしながらかれの時代にあつては、帝国主義の歴史的段階を予見することができなかったし、したがつて全資本主義における剰余価値法則の作用の一般、歴史的條件から、前独占資本主義における剰余価値法則の作用の具体的・歴史的條件を区別するという課題を定立することができなかった。」

ユールマイ教授がここで主張しようとしているところは、プランのうちで第一、第二、第三の諸項目は資本主義の経済的基本法則の抽象的一般的條件に関連し、第四、第五、第六の項目は、その具体的・歴史的條件に関するところのように思われる。われわれの問題とする外国貿易や世界市場は、だから資本主義的経済法則の具体的歴史的條件の問題である。

- (1) マルクス「資本論」第二卷
- (2) レーニン「ロシアにおける資本主義の發展」
- (3) 宇野弘藏「恐慌論」
- (4) 同 右
- (5) G. Kohliny: Die abstrakt-allgemeinen und die konkret-historischen Bedingungen des ökonomischen Grundgesetzes des Kapitalismus (Wirtschaftswissenschaft 1935 Heft 4)
- (6) ebenda

## 四

こうして外国貿易や世界市場の問題が、資本主義的経済法則の、具体的歴史的條件に關するものであることは明らかになつたが、さてその内容はどのようなものであるべきか。この点に關してわたしは二、三年前に東北大学の原田三郎教授との間に若干の意見の交換をやつたことがあるが、以上の考察を前提にしよう一度この問題に立帰つてみよう。

原田教授がマルクスの経済学プランのうち第一、第二、第三の項目が大体において資本論のなかに含まれてゐる、少くとも含まるべきであると言はれる点では、直接宇野教授に言及されてゐないけれども、大体宇野教授と同意見である。だからその見解には十分根拠があるといふことは、さきに宇野教授の見解についてのべたと同様である。さらに資本論の方法によつて、抽象から具体へ向上して到達せられた資本主義が、特定の具体的・歴史的な資本主義、例えばイギリス資本主義とか、日本資本主義ではなく、あくまで抽象的・一般的な資本主義であるとされる教授の見解にも賛成である。

教授とわたしの意見のわかれるのは、資本主義的経済法則の具体的・歴史的條件を取扱ふべき、外国貿易論乃至は世界経済論の内容についてである。前にも引用したことがあるが、原田教授は、国際経済学会誌「国際経済」第二号の「世界経済論の出発点としての帝國主義の成立」と題する論文のなかでつぎのようにいわれる。「まづ、一方では固有の資本主義が諸国民経済として完成されるに至つた過程において、歴史的・具体的に形成されきたところの『生産の國際的關係』・『外國商業』・『世界市場』——總じて國際的經濟關係、とりわけ工・農の國際的分業

としての本国対植民地という関係についての歴史的・具体的規定と、他方資本主義の新たな『段階』——本質規定（いわゆる帝國主義乃至金融資本論）とが、すてに前提されたものとして、明らかにされていなければならない。

だが厳密なる意味での世界經濟論は、資本主義の帝國主義『段階』への転化の特殊・具体的過程としての諸帝國主義の成立、すなわち諸独占資本主義の『型』の成立の分析を、起点とすべきである。」右のように原田教授が、世界經濟論の内容として考えておられるところは、諸独占資本主義の型にかんする具体的・歴史的叙述である。マルクスによる經濟学のプランは、第一、第二、第三の資本主義の抽象的一般的法則の究明から、第四の項目以下に入つて突然変異し、資本主義の具体的・歴史的叙述となるのである。なるほどマルクスやレーニンには、国家や外国貿易を歴史的なものであると、しばしばいつている。またさきの引用句において、コールマイ教授も第四の項目以下を、資本主義的經濟法則の具体的・歴史的條件に関するものであるといつている。しかしながらわたしの見解では、これらの言葉は、原田教授の理解されるように、これらの諸項目の法則的把握を排除しているものではない。国家や外国貿易や世界市場という具体的・歴史的條件のなかに、いかに資本主義の經濟法則が作用しているかを明らかにすることこそ、經濟学におけるこれらの分析の果すべき役割なのである。たとえば外国貿易という歴史的條件が資本主義と結びついたとき、そこにいかにして資本主義の一般法則が作用するかを明らかにすることが、外国貿易論の任務であつて、各国の外国貿易を具体的・歴史的に叙述することがその任務なのではない。

かくて經濟学にかんするプランはつぎのように解釈されることになる。第一、第二、第三の項目は、資本主義の一般法則についてであり、第四以下は、それぞれの具体的・歴史的條件においてその一般法則がいかにして貫徹するかを明らかにしようとする項目である。したがつてプランの最後におかれた世界經濟は、資本主義の一般法則が、

もつとも具体的な形において展開される場であろう。しかしそれは各国資本主義の具体的・歴史的叙述ではないのである。

- (1) 原田三郎「世界経済論の出発点としての帝国主義の成立」〔「国際経済」第二号〕